

「日々の理科」(第 2780 号) 2022, -3, -3

「雪とつららの探究 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

私の山荘がある北軽井沢は、水系としては利根川水系の源流部に位置し、気候も基本的には太平洋側の気候区に属する。雪もそれほど多くなく、年によっては、ほとんど積もらないこともある。



しかし今年の北軽井沢は、まとまった雪が数回降って、しかも気温も低かったので、雪がほとんどとけなかった。一旦地面に雪が積もってしまうと、太陽光のほとんどを反射してしまい、地面が温まらない。地面が温まらなければ気温も上がらない。教科書に書いてある通りである。これを「アルベド効果」という。



例年 3 月に入ると、このあたりは畑の土が少し見え始めるのだが、今年は除雪された道以外は、まだすっかり銀世界である。遠くの山は上信国境(群馬・長野の県境)の山脈にある「破風岳(1999m)」である。



私は数か月ぶりに北軽井沢を訪れたのだが、山荘もまだ雪に囲まれていた。この日は快晴だったが、やはり気温が上がらず、とても寒かった。



町道や駐車場前の私道は除雪されていたが、駐車場から母屋のベランダまでは、人力で除雪するしかない。降ってからかなり日が経っていたので、雪が締まって重くなり、道をつけるのは大変だった。



裏庭へ行く道も、除雪した雪の堆積で「行き止まり」になっている。まずは、止水栓までの道をつけて、「水出し」をしないとイケない。なかなか大変そうだ。